

平成9年4月30日現在

福堂 FUKUDO

世帯数 185戸
人口 793人

栗見十郷

村は荘園制から守護大名の領地へと移り、六角氏、京極氏、浅井氏、織田氏と近江を舞台に戦国の動乱が到来しました。

当時、栗見庄は、現在の阿弥陀堂、新宮東、新宮西、福堂、乙女浜、川南、小川の半分、本庄、田附、新海の10カ村からなり、栗見十郷と呼ばれていました。いまは愛知川をはさんで彦根市と能登川町に分かれています。その頃は愛知川の本流は彦富から甲崎にかけて北部を流れており、いまの愛知川下流は支流であり川幅も狭かったと言われます。天文13年(1544)7月と永禄6年(1563)の洪水により愛知川の主流が変わり、栗見庄は2つに分断されてしまいました。それ以後愛知川をはさんで北側を「栗見北庄」、南側を「栗見南庄」と呼ぶようになったと言います。

地名「福堂」の由来

正覚寺本堂正面の額に「福^{ふく}巍^ぎ堂^{どう}」と書いてあります。もとは「ふくぎ堂」という天台宗のお堂でした。額の中にある福巍堂の「巍」の字をはぶいて福堂の地名になったのです。天台宗より真宗に変わったのが文明9年(1477)のことです。

福堂の火の元番

安永9年(1780)多くの村人が川原までお祭りに出かけ、ほとんどの家が留守になったとき、大火事があり、105軒と2カ寺を焼失したとあります。以来、祭りの当日は村に火の元番をおくことになり、いまでも昔ながらの服装で守っています。

巡礼塚

宝暦5年(1755)に琵琶湖で遭難した西国巡礼者72人を埋葬した墓地(巡礼塚)に昭和59年(1984)歌人井伊文子さんの歌碑が建てられました。遭難者の子孫の浄財により、完成しました。

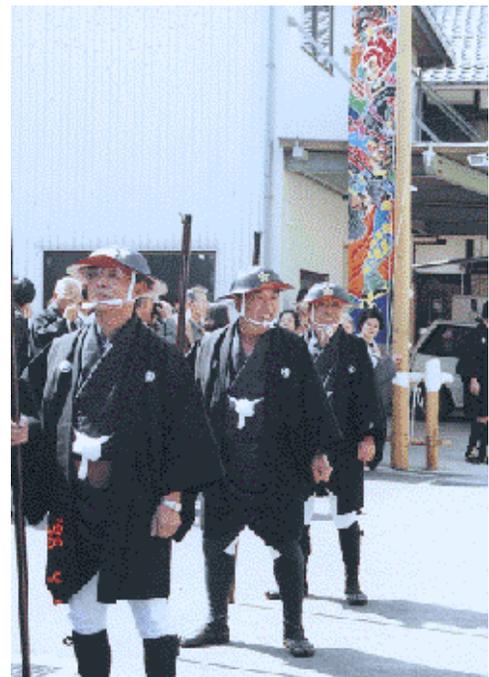
歌碑には、

「望郷のおもひ鎮めて とことばに
ふく堂の地に やすらひたまへよ」

と刻まれています。



地名の由来となった「額」



火の元番

平成9年4月30日現在

栗見新田 KURIMISHINDEN

世帯数 114戸
人口 495人

私たちの字、栗見新田は能登川町の最北西部に位置し、琵琶湖と愛知川に接する自然に恵まれた中の平地農村集落です。湖周道路も開通し、大同川の水車橋から湖面を眺めると、夕日に映える風光明媚な琵琶湖の景色は格別なものがあり、休日には観光やレジャーを楽しむ人たちにぎわっています。

また、一段と広がった大同川には、新しくホテルのような揚水機場と水門橋ができ、水門によって貯えられた内湖の水により、大地に潤いを与え豊かな実りを私たち村民に施してくれています。

南側には湖を埋め立ててできた大きな運動公園があります。年1回夏にグランドゴルフ、秋には11組がお互いに競い合う村民運動会がこの運動公園で行われています。また、その隣にはさわやか広場があります。そこには各組が担当する花壇があり、四季折々の花が咲

き、人々の目を楽しませ心を和ませてくれます。

運動公園からさらに東に進むと栗見新田開村以来の社、日枝神社があります。寛文12年(1672)、彦根藩主直澄時代に栗見荘十郷の18人の人々により草刈場が開墾されてできたのが、栗見新田の草創であると開村記録に記されています。また、日枝神社の由来も産土神鎮守日枝神社事として記録控があります。日枝神社祭事には春秋の大祭があり、古式にのっとり豊作を祈願しての、供および松明の奉納があります。子ども・若衆により燃え盛る松明を引き回し、最後に奉納された松明の炎が社の夜空を明々と照り焦がすさまは、若さと明日への活力を私たちに与えてくれます。

古人たちが今日まで言い伝え残してくれた遺産と、いずれは過去になる現代の文化を大切に守っていきたいと思います。



大同川水門橋
宵宮松明焼き



平成9年4月30日現在

栗見出在家

KURIMIDEZAIKE

世帯数 104戸
人 口 445人

栗見出在家の始まり

彦根藩・代官西村助之丞は、自らの新村開発計画を藩主井伊直中に説き、新たに開発奉行の任を受け、文化3年(1806)4月17日、愛知川の三角州地帯の開発に着手しました。

もともと栗見郷の所有地とみなされていたこの地は、愛知川から流れ出す砂礫が、その河口から琵琶湖沿いに伊庭の内湖にかけて堆積し、その上に葎が生い茂り広大な葎原を形成していました。

冒険思想に富んだ漁夫、犬上郡磯田村大字須越の権左衛門はすでにこの湿地の一部を開墾し、それ相応の収穫のあげられることを実証していましたが、彦根藩は、これを藩領であるとして取り上げ、開発奉行西村助之丞のもと、附近の村々の人足に栗見新田の地続きの湿地から開墾させました。

栗見出在家の歴史の始まりは、この開墾地に、栗見六郷からなる選抜42戸の入植をしたことです。

開発地、田畑21町歩(約21ヘクタール)余りの中心部に入植者の居住地を設け、表の街路は当時類のない5間(約9.1メートル)幅の道路を配し、大川小川の堀を縦横に貫通させ水上交通と水利の便を同時に図り、江州唯一の模範的新開地を形成しました。

入植者は、開拓者精神を持ち、今日まで美風良習を継承して来ました。

今日に至っては、表面的な利便性が優先され、栗見

出在家らしさを残す堀が埋め立てられたり、開村当時が偲ばれる数多くのものも姿を消されてしまっています。

西村奉行は、開発当初、烏合の衆たる民心を一致せしめるために、この村の鎮守として、祭神天照大神とともに、海川の守護神住吉明神と、延命の神多賀明神を合祀した神明神社を、文化5年9月16日創立しました。

水難等、水と深い縁のある栗見出在家にとって延命息災を祈願することは、村人の切望するところでもありました。

文政2年(1819)4月西村奉行の死後、業績をたたえ英霊を祀るべく、神明神社のお旅所に、村人たちは西村神社を建立し、その碑は湖浜より村全体をいまでも見守り続けています。

開村当時の村人の粋を偲ばれる手がかりの一つに、形は変わりながらもいまに伝わる春と秋の大祭があります。葎松明を燃し立て(一面では魚族を集め、一面稲田の害虫の駆除を意味する)西村奉行の開発を記念し、神明神社の御加護に感謝する神事が、毎年4月と9月に行われています。

もうすぐ栗見出在家は満200歳を迎えようとしています。村人の多様な価値観の中にあっても、ふるさとを意識できるお祭りなどは、栗見出在家が続く限り、伝統的に受け継がれていって欲しいものです。

神社境内の神事



神社前の長松明



平成9年4月30日現在

中央 CHUO

世帯数 13戸
人口 51人



春から秋にかけて須田川はバサー(バス釣り人)でいっぱい



須田川と堤防の清掃作業(夏)

私たちの字「中央」は13世帯で町内の行政区でもたいへん小さな集落です。かつては小中の湖と呼ばれた内湖が終戦間もなく干拓されてできた集落であり、きぬがさ三集落(城東・中洲・中央)の一つです。湖であった頃、中央集落付近は、“胴立ち”と呼ばれるところがありここに泳ぎたどって立つと、内湖の水面がちょうど体の腰のあたり(胴部分)の深さの浅瀬であったと聞いています。

昨年(1996)はきぬがさ三集落が誕生して50周年の記念すべき年でした。当字は、残念ながら記念行事を計画しませんでした。城東と中洲区では、区民あがての盛大な記念行事が行われました。記念行事に招待をいただき、入植当時に大変なご苦労をされたことを知って胸の詰まる思いがしました。

もう、おわかりいただいたでしょうか? 中央集落は、東に 織山・南に安土山・北に須田川があり、集落の周りは田んぼばかりのいわゆる“田園地帯”です。

さて、字内の活動ですが、なにせ13世帯ということで毎年、世帯のほとんどのものが区長をはじめ各役員にあたります。字単独の活動としては、河川清掃・草の根広場の除草・敬老の日の慰労会・地藏盆ぐらいです。町民運動会や綱引き大会などの大きな行事は、城東区の皆さんにまた地区行政行事では、中洲区の皆様にも大変お世話になっています。

したがって、何をするにも大変です。やはり、大きな行事は、城東や中洲区の皆さんにお世話にならなくてはなりません。近い将来においても中央の世帯・人口の増加は見込めそうにもありませんので、これからもよりいっそうの集落全員の結束を強化し、「中央はすばらしいところだ!!」とみなさんから言われるように頑張っていきます。

これからもどうかよろしく願いいたします。ご声援ください。